

## ベトナムフィールドワーク（7/30～8/3）

高校2年生4名（岩本賢菜さん、濱洲和佳さん、山口優衣さん、林田姫芽伽さん）が、文部科学省指定WWL事業と長崎東同窓会奨学会の助成を受け、熱帯感染症や国際医療保健についてフィールドワーク（以下、FW）を実施しました。生徒4名の報告を、下記に掲載します。

### 長崎大学熱帯医学研究所ベトナム拠点での研修



熱帯医学研究所・アジア・アフリカ感染症研究施設ベトナム拠点（以下熱研）で行っていただいた、同拠点の拠点長である長谷部太先生、研究員である阿部遥先生から拝聴したご講義について、報告します。

長谷部先生はFWの1日目に熱研で、「ベトナムと長崎大学との研究協力」というテーマで講義をしてくださいました。ベトナムと長崎とのつながりや歴史、熱帯病の概要について新たな知識を得ることができました。さらにはご自身が感染症に罹患された

↑【長谷部先生の講義】  
 際の壮絶な闘病経験、過酷な現地での実験についてなど、先生ご自身が体験された困難な経験を、逆にチャンスと捉えて楽しみながら学び抜いているお姿に感銘を受けました。

私が特に印象に残ったのはコウモリを介した熱帯病とそれを調べるための先生の研究についてです。先生のお話では、コウモリという種は哺乳類の中でも進化の早い段階で分かれたため独自の進化を遂げ、ウイルスの宿主に適した免疫の仕組みや繁殖の仕方になっていったそうです。また先生は、フルーツコウモリをご自身で現地に行って網などで捕獲し、血液検査などをおこなっているとおっしゃっていました。私自身もともと人獣共通感染症に興味があり、調べていく中でコウモリが鍵になることはわかっていたのですが、コウモリの進化とウイルス保持の仕組みに関係があることや、先生のようにコウモリを捕まえて調べている研究者の方の実体験を初めて聴き、とても興味深かったです。質問にもたくさん答えていただきました。

阿部先生は、2日目に熱研で海外での研究の意義について講義をしてくださいました。内容は主にフィールド研究者についてのことや発展途上国で感染症が広がる仕組み、ご自身の海外での経験などで、過酷な環境での研究やその滞在期間に生じる不便さを楽しみながら乗り越えていることが感じられる講義でした。

（第16号に続く）



↑【熱帯医学研究所ベトナム拠点】

私が先生の講義の中で一番印象に残ったことは、フィールド研究者としての先生の現地での生活についてです。私の中では、医学研究者という仕事は、清潔な研究室で患者さんのサンプルや薬品を扱う仕事というイメージがあり、現地で直接患者さんや病原体を媒介する生物に触れたい自分には、新しいことを知るという点で興味はあるものの、適してはいないなという思いがありました。

しかし今回の講義を聞き、フィールド研究者という新しい選択肢を視野に入れることができ、医学研究者のイメージがガラッと変わりました。また先生は研究で訪れた途上国での暮らしについてもお話してくださったのですが、新しい発見にあふれたその土地その土地での生活を、不便ながらも楽しんでいらっしゃる様子で、とてもうらやましく思いました。講義後もたくさん質問に答えていただき、多くの発見がありました。



熱研では主に感染症についての講義を、長谷部先生、阿部先生のお二人からしていただきました。いずれもご自身の研究や経験を交えた貴重なものであり、多くの気づきや発見がありました。これらをどう自分の人生につなげていくかが今後重要になると思うので、私は自分の進路についても一度よく家族と考え、自分の内面を磨くための学習を続けていきたいです。

また、講義だけでなく現地での食事や夜市での買い物の手助けをしてくださり、ニャチャンまで同行して下さった長谷部先生、同じく講義だけでなくレストランやカフェに同行して下さった阿部先生、事務局の森まど

↑【長谷部先生、阿部先生と共に】 か様、このFWに関わって下さったすべての方々への感謝を忘れずに、今回のベトナムFWを必ず意味のあるものにできるよう、努力したいと思えます。(岩本 賢菜)

## ベトナム保健省での研修

今回のFWでは、ベトナム保健省を訪れ、前厚生労働省健康局長で現在はJICAベトナム職員としてベトナム保健省アドバイザーを務められている、正林督章様のご講義を拝聴しました。

正林様からは、先生の今に至るまでの様々なご活躍を背景に、主に公衆衛生行政についてのお話を伺いました。国民全員の健康を考える中で、日本人の均質な国民性や平等意識を念頭に置いた対策の考え方や経緯をご教授いただき、それまで自分自身が全く意識していなかった医療の根本を目にすることができました。

(第17号に続く)



↑【ベトナム保健省】





↑ 【正林先生の講義】

私たちの質問にも、一つ一つ丁寧に答えてくださいました。途上国における医療支援においては、罹患者の治療よりも罹患者数の削減を目的に予防に尽力し、支援期間満了後もその地域での医療水準の向上が継続できるような支援の実施や、国全体で公衆衛生改善に動くことで自発的な行動が難しくても自然と国民が健康になれる社会への、具体的かつ理想的ビジョンについて、お話しをいただくことができました。先生のお話は私自身の探究テーマと重なる部分が多かったこともあり首尾一貫琴線に触れるお話を伺うことができました。私たちのためにお忙しい中お時間をとっていただいただけでなく資料まで用意してくださった正林様には感謝してもしきれません。

今回の研修では、日本の机上での学習では絶対に得ることができない唯一無二の学びを数多く得ることができました。様々な方々から多様な経験を背景にお話を伺う中で、全員が自身の選択に絶対の自信を持ち自分にしかできないことを仕事にしていらっしゃることを痛切に感じました。

今この方と同じ、この道に進み同じ仕事をしたい、と自分から選択肢を狭めることはせず、将来自身がどのような道を目指すことになっても、広い選択肢の中から自身の使命感に従って進む道を選ぶことができるようになりたい、そのために今は何か特別なことをするというよりも、当たり前前のことを当たり前前できるようにしたいと強く思いました。

今回のFW や日々の学びが常にどれほどの方々のご尽力の上に成り立っているかを念頭に置き、これからは学習や部活、探究活動等にこれまで以上に精進していきます。

将来、今回のベトナムでのFW を機に一回り成長したからこそ今の自分がある、今までの自分の頑張りには悔いはないと自信をもって振り返ることができるよう、前向きに励んでいく所存です。(山口 優衣)

(第18号に続く)

当時の安倍総理大臣や菅総理大臣、加藤厚生労働大臣と連携をとりながら、国家行政の中心として法の制定、改正に深く関わってこられたお話にも、終始感銘を受けました。

また、都市部と地方の甚大な医療格差や保険財源の確保の滞留に起因する医師の給料やモチベーションの低迷といったベトナムの公衆衛生における問題についてもご説明いただきました。正林様が行われている対策についてもご説明いただき、「自分にしかできない」仕事への誇りと、その素晴らしさに触れることができました。



↑ 【正林先生と共に】

## JICA ベトナムでの研修

JICA ベトナムでは、国際看護師として活動してこられた山下祐美子様より、JICA の活動や理念、ベトナムでの支援の実態、またご自身の国際医療活動の体験談について拝聴しました。

JICA は貧困や飢餓といった問題を抱える発展途上国に日本から知識や技術を伝える、二国間援助をしている組織です。その援助は大きく「技術援助」「有償資金援助」「無償資金援助」の3つに分けられます。「技術援助」とは、具体的に人材育成や人材派遣のことをいいます。「有償資金援助」とは、金利を下げ、長期的な返済を前提に金銭的な援助をすることです。これは

技術援助で人材を派遣するためにも必要な橋の建設などに使われます。「無償資金援助」とは、発展途上国の中でも特に経済発展が遅れている国、後発発展途上国に対する返済の必要がない金銭的援助のことをいいます。これは学校建設やインフラ整備などに使われます。

ベトナムは、現在、健康寿命の短さやNCDs（非感染症疾患）、日本よりも速いスピードで進む高齢化、また人材不足などの諸問題を抱えています。そのため、全ての人々が十分な質・量の医療サービスを受けられる世界を指す「UHS（ユニバーサル・ヘルス・カバレッジ）」を目標に、成長と競争力強化、ガバナンス強化、脆弱性の強化を進めています。山下先生の講義から、具体的なシステムやベトナム支援の実態を詳細に学ばせていただきました。



↑【山下先生の講義】

また、私は山下先生のご経歴を踏まえた体験談から、自分自身の進路について改めて見直すきっかけを与えていただきました。

山下先生は高校・大学と留学経験があり、イギリスでは保険システムや政策について学び、日本で看護師経験を積まれました。その後、NGOのプロテクトマネージャーとして、ラオスに埋まる不発弾の対応や、それが爆発しケガ人が出たときの応急処置の方法を現地の方へ指導をしていました。そこで、特定の地域の医療不足を解決するためには、国の大きな力が必要だと考えられ、現在 JICA にお勤めされ、国家レベルで医療環境の改善が行えるよう努めておられます。（第19号に続く）



↑【山下先生と JICA ベトナムにて】



私は先生のご経歴から、目標の達成に向けて、最善を常に目指す、達成するための強い意志をひしひしと感じました。そして、この強さが本当に目標達成する上で必要なのだと学びました。

また、私は、知識や技術を「教える」という立場であるとき、どうしても「教えられる」側、つまり現地の人からは上から目線だと思われがちだと考え、そうわれずに知識や技術を伝えるために、どのような姿勢で現地の人と関わっていくべきか質問しました。すると先生は、国間援助をするときには援助する側のみならず援助を受ける側からの協力も必要であるとおっしゃいました。

援助側の考える「良いもの」と被援助側の考える「良いもの」を話し合いによりすり合わせることで、最も「良いもの」ができるそうです。私たちはこの国間援助には援助している側が常に正解ではないということを芯から理解した姿勢が必要だとわかりました。(濱洲 和佳)

### 長崎大学熱帯医学研究所ニャチャン分室・パスツール研究所での研修



↑【樋泉先生の講義】

「ベトナムのハワイ」と呼ばれるニャチャンにある、パスツール研究所での研修についてご報告します。パスツール研究所は、1887年にパリで設立され、世界32機関に展開されています。フランス領の名残で、建物は黄色で塗装されています。

ここでは、熱帯医学研究所の樋泉道子先生にベトナムにおける感染症医療の実態についてご講義をいただきました。小児科医として活躍されてきた先生から、感染症について専門的な知識をご教授いただき、大きな学びの機会となりました。特に、感染症が派生して聴覚障害や発達障害が引き起こされる実態が興味深く感じました。

また、研究所の見学も行うことができました。私は研修を通じて、私たちが享受している医療の裏では、多くの研究者の努力があることを実感しました。感染症によって生活を脅かされている多くのベトナムの方たちのため、私たちが知りえぬところで努力されていることを知り、研究者のみなさんに尊敬の念を抱きました。さらに、日本では普通に打てるワクチンを、ベトナムでは経済面から打てない現状があるということを知りました。ワクチンの性能だけでなく、経済面からもアプローチし、多くの方が格差なく健康で暮らせるために、また、不安なく暮らせるために実験やFWを積み重ねていることを学びました。

樋泉先生からいただいた「小さな違和感や気づきが大きな変化や発見に繋がる」のお言葉に、とても感銘を受けました。偉大な医療的な成果も、きっかけは些細な発見から始まっているものが少なくありません。小さな気づきが多くの人を救える可能性を秘めていることを学び、これから、私自身、日々の生活の中での気づきを大切にしようと思いました。(林田 姫芽伽)

今回のFWは、ベトナムの文化や環境を肌で感じ、様々な人と対話交流をする中で多様な考え方に触れることができました。このFWでの学びを、探究学習やキャリアプランニングに生かしていく所存です。長谷部拠点長様をはじめ、ご尽力いただいた長崎大学の先生方、ベトナム保健省やJICAのみなさま、そしてご支援いただいた長崎東同窓会奨学会にお礼を申し上げたいと思います。誠にありがとうございました。(参加者一同)

